

会 議 記 録

会 議 名	令和5年度矢板市総合教育会議
開催日時	令和5年12月11日（月） 16:00～17:27
場 所	矢板市生涯学習館 研修室1
出席者	<p>【構成員】</p> 齋藤市長 教育委員会 塚原教育長、 池田教育長職務代理人、齋藤委員、岡委員、宮本委員 <p>【出席依頼職員】</p> 教育部 細川部長兼課長、小原教育監 教育総務課 斎藤課長補佐、高久主幹、井上管理主事兼指導主事、 清水指導主事、森本指導主事 生涯学習課 佐藤課長、大澤室長、海瀬社会教育主事 <p>【事務局】</p> 三堂地副市長 総合政策課 和田部長兼課長、藤田課長補佐、松本主査、小林主査
傍聴者	なし
報道関係者	なし
会議の内容	
開 会（16:00） （進行：和田総合政策部長）	
1 開会	
▶ 和田総合政策部長	
教育委員の皆様には、教育委員会定例会に引き続きお時間をとっていただき、ありがとうございます。	
それでは、ただいまから令和5年度矢板市総合教育会議を開会いたします。	

2 あいさつ

▶ 和田総合政策部長

はじめに、齋藤淳一郎矢板市長より御挨拶を申し上げます。

▶ 齋藤市長

本年度の矢板市総合教育会議の開催に当たりまして、まず私から一言御挨拶を申し上げたいと思います。

先ほど総合政策部長からもございましたように、教育委員の皆様におかれましては、本日の教育委員会定例会に引き続き、本会議に御出席いただき、誠にありがとうございます。

また皆様におかれましては日頃から、本市における学校教育及び生涯学習の推進に当たりまして、格別の御尽力をいただいていることに対しまして、重ねて御礼を申し上げる次第でございます。

さて、本会議、総合教育会議でございますけれども、市長と教育委員会が円滑に意思疎通を図り、本市教育が抱える課題や目指すべき姿を共有しながら、教育行政を推進していくことを目的といたしまして、毎回具体的なテーマを設定させていただいた上で、平成27年度から実施をさせていただいている取組でございます。

本年度につきましては、お手元の次第でございますように、「市立中学生の学力向上について」と、「学校部活動の地域移行について」、この2つをテーマとさせていただきました。

このうち、「市立中学生の学力向上について」は、昨年度の本会議でも取り上げさせていただきました。

昨年度の会議の結果を受けまして、本年度から教育委員会では、中学生の学力向上策に取り組んでいただいているところでございますが、その現状と今後の取組の方向性について、改めて皆様方と共有できればというふうに考えております。

また、2点目の「学校部活動の地域移行について」でございますが、県からモデル校として選定をされた矢板中学校において、令和3年度から取り組んで参りました実践研究の成果、これをお聞かせいただき、更なる施策推進に向けて、意見交換等をさせていただきたいと考えております。

委員の皆様におかれましては、本日も忌憚のない御意見を賜りますようお願いを申し上げます。まして、私からの御挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いたします。

3 議 題

▶ 和田総合政策部長

それではこれより、議題に入らせていただきます。

本会議は、矢板市総合教育会議設置要綱第3条の規定により、市長が招集することとなっておりますので、議事の進行は、市長が務めることといたします。

それでは、市長よろしく申し上げます。

▶ **齋藤市長**

それでは、お手元の次第に沿って議事を進めて参ります。

円滑な議事進行に御協力いただきますようお願い申し上げます。

(1) **市立中学生の学力向上について**

▶ **齋藤市長**

それでは、1つ目の議題でございますが、「市立中学生の学力向上について」でございます。

このことにつきましてはまず、事務局から説明をいただきたいと思っております。

(※議題資料を大型ディスプレイに表示しながら説明)

▶ **小原教育監**

今年度、5つ対策を取らせていただきましたが、その対策は適切であったか、御協議いただくとともに、次年度へ向けて、5つ案を提案させていただきますので、それに関する御意見を皆様からいただけたらありがたいです。よろしく申し上げます。

まず1つ目の対策です。中学校授業力向上対策合同研修会を実施しました。

これは宇都宮大学と連携して、御覧の3教科(国語科・数学科・英語科)について、2校(矢板中学校・片岡中学校)合同で授業研究会を実施し、両校の先生方が互いに切磋琢磨しながら、授業改善を考える機会を提供することで、学力向上につなげようという目的で実施していただきました。

先生方、非常に熱心に話し合いをしていただきまして、それぞれ自分の授業改善をしようという意気込みが見られましたので、非常によかったかなと事務局では考えております。

2つ目。中学生放課後学習塾の開講です。

こちらは、中学3年生を対象に数学と英語で実施をしました。10月中旬に生徒たちにアンケートを実施したところ、生徒たちは、主に学校の宿題、自主学習ノート、そして自分で購入した問題等に取り組んでおりました。

最近では、県立高校入試の過去問とか、ミニテスト、自分で受けた模擬テストをもう一度復習するなどといった生徒も含まれています。

これに参加した生徒たちは、参加してみて「よかった」、「まあまあ」ということで、肯定的な回答をしてくれた子が多かったです。

では、何がよかったのかということで、主なものを3つ資料では挙げさせていただきました。「家で勉強するより、学校の机だと勉強がはかどる」ということで、場所がよかったということ。そして、「友達とお互いに自分の勉強をして、学力を高め合うことができる」という

こと。こちらは、やはり、一緒にやっている仲間がいて、そこで頑張るぞという意識が高まるとのこと。最後に、「分からないところを学習塾の講師が優しくわかりやすく教えてくれる」ということで、講師の存在、これがよかったというような、主な回答がありました。

しかし、逆にですけれども、友達がたくさんいることで、「あまり集中できる環境ではなかった」とか、慣れてくるまでは「教えてほしいときに手を挙げづらい雰囲気があった」とか、講師の方から生徒に話かけてくるので、「自分は集中してやりたいのに…」ということ、控えて欲しいなと思うこともあった、ということでした。

出席についてですが、資料にあるように、気軽に休んでしまうという生徒もおりました。

よかった点としては、今挙げたとおりですが、改善しなければならない点もありましたので、こちらはその都度、委託業者と連絡を取り合い、少しでもよくなるように進めて参りました。

3つ目。教育長メッセージの発出についてです。

これは、国と県のテストの結果を受けて、家庭での学習の時間に課題があるということがわかりましたので、それを少しでも改善させるために発出したものです。

市の方で運営に関わっております4つの場所（イケポス池田キッズハウス・矢板市立図書館・市役所3階議場・ココマチ1階フリースペース）も紹介しましたので、こちらが、昨年よりもずっと利用が多くなったということで、それぞれの場所の担当者から回答をいただきました。

4つ目。中学生学力調査の実施です。

こちらは、ちょうど先週から今週にかけて実施しているところです。このテストの結果を活用して、少しでも、学力が身につくようにというところで、今後の分析と、それから改善策が大切になってくると思います。

5つ目。矢板地区小中連携推進事業を立ち上げようとしているところです。

1回目の話し合いは済んだところですが、片岡地区を見習いまして、矢板地区においても、小学校と中学校とでより良い持続のあり方を話し合うことで、学力向上につなげようという方向で今協議を進めているところです。

これらを受けまして、次年度は、(1)の中学校授業力向上対策合同研修会と(3)の中学生学力調査については継続、(2)の中学生放課後学習塾については拡大、(4)の矢板地区小中連携推進事業については本格的に開始する、そして、(5)の矢板市立中学校版学力向上推進リーダー事業の検討を開始したいと考えています。

まず、(4)の矢板地区小中連携推進事業の内容についてですが、学力向上という点については、授業研究会として、やはり授業、教師の授業力向上というところに焦点を当てて取り組

みたいということで、今、話を進めています。

(5)の学力向上推進リーダー事業についてですが、こちらは、各中学校の校長と話し合い、その要望に応じて、指導主事が、日常の授業づくりに関わるということで、主体的に教員が取り組めるように検討を開始する方向で話を今しているところです。

以上になります。よろしく申し上げます。

▶ **齋藤市長**

事務局から説明がございました。議題の(1)市立中学生の学力向上についてでございます。

なぜ小学生ではなくて中学生なのかということにつきまして、改めて確認をさせていただきますと、本年度令和5年度の最新の状況についてお話をさせていただくと、矢板市の小学生につきましては、全国学力学習状況調査、全国学力テストですね、それと、とちぎっ子学習状況調査、これは県の調査ですが、国県の調査でともに平均正答率が全国平均または県平均を上回ったといった状況でございます。その一方で、中学生につきましては、全国平均県平均と同程度または下回ったといった状況がございます。

このことについては、昨年度の総合教育会議でも取り上げさせていただきました。小学生に比べて中学生の学力がどうしても伸び悩んでいるという現状がございましたことから、新たに、特に、中学生向けの取組、これを早速市教育委員会の方で取り組んでいただいているところでございます。

初年度ということではございますけれども、以前から問題意識としてあったところに、きちんと対応していただいているのかなと思いますけれども、まず本年度の取組について、何か委員の方から御意見等がございましたら、御発言をいただければと思いますがいかがでしょうか。

▶ **齋藤委員**

今市長の方からは、学力調査の結果のお話だったんですけど、今文部科学省では、5教科的なペーパーテストで測れるような学力ではなく、生き抜く力とか、生きる力ということに重点的に色々対策としてやっているんだと思うんですね。主体的に学ぶとか、対面的にこういう話ができるとか、深い学びですか。

そういうようなものではなくて、今市長が考えているものは、ペーパーテストで測れるようなものというようなことで今この議論を進めてよろしいですか。

▶ **齋藤市長**

確かに齋藤委員からお話ありましたように、主体的に学ぶであったり、または深い学びであったり、最近STEAM教育っていうんですか、教科そのものというより、そういった教育の必要性というものが言われているかと思います。それについては私自身も、これから時代の大きな転換期にある中で、社会人になっていかななくてはいけないお子さん方には必要な

教育だと思っておりますが、そうしたことに取り組むにしても、なぜ、矢板市内の子どもは、小学校から中学校に上がると、端的に申し上げると学力が下がってしまうのか。やはり読み書きの力に基礎的なものがないと、さらにその上の段階にいけないのではないかということ。

あと、どうしてもやはり、地域間競争と言われている中であって、学力テストの点数が高い低いという点は、まちづくりを推進する上でも、やはり数字で表せるものということで、これは無視できないのではないかなと思っているところでございます。

齋藤委員の御指摘はごもっともではあるんですが、それはそれでというわけではないのですが、まずは基礎的な、と私は理解しておりますけれども、(学力の) 底上げがまずは必要なのではないかなという認識を、私自身持ち合わせているところでございます。

▶ 齋藤委員

確かに客観的なデータとして点数が出てくるというのは、有無を言わずその通りだと思えます。ただ、少しずつ東大をはじめ国公立大学の推薦入試なども増えてきていますから、プラスアルファでやっぱり色々考えていくべきなのかなというふうに思いますが、市長の話はごもっともだと思います。

私も、ある高等学校で進路指導部長を9年間やっています、そのときに生徒保護者に話したことは、「学力なくして進路実現はありえないんだ」と。とにかく可能性を高めるために、学力、ここでいう「学力」というのは、市長が話しているような、5教科で測れるような、共通テスト或いはセンター試験での得点を高めるために色々取り組んだところであります。

まず、学習時間を確保して、とにかく学力を高める。これが自分たちの、将来の夢を考えるための武器となるんだということは話をしてきました。私も矢板市民として、もう60年以上住んでいますから、少しでも(学力を)高められればと思っているところであります。

そのために、今小原先生(教育監)から色々お話がありましたが、こうしたことに取り組んでいけば、少しずつであっても、学力が向上するのではないかなとは思っています。

教育というのは、未来への投資だと思うんですね。すぐに結果が現れるかということ、そうでもないと思います。

私は今、矢板中央高校に勤務しておりますけれども、教えている生徒で、泉小学校・泉中学校出身の子と色々話をしてきました。その中でその生徒に、「今までで一番いいことは何があったかい?」といったことを聞きましたところ、中学2年生のときにアメリカに行ったと。「なんで行ったの?」と尋ねたら、矢板市の海外派遣で行ったんだと。ホームステイなどを通して、現地の人と英語で話をするのが少しできて、英語をもっと頑張ろうというふうに思ったそうです。その生徒は今、英検2級ということです。こうした取組にもやっぱり、少しずつではありますけれども、すぐに効果が現れるか、また、将来矢板市としてリターンがあるかどうかわかりませんが、その辺のところは大目に見て、日本全体として良くなればいいんだといった広い心でやればいいのかと思うんですね。とにかく、そのようなことで、(教育に係る) 予算が少しずつ削られているところでありますけれども、ぜひ色々な面

で、生徒保護者の期待に応えられるように、市長の方にも色々御尽力いただければ。そうしただけであれば、矢板市は ICT（教育）では結構有名ですけども、それに加えて、ますます矢板市に住みたい保護者生徒が増えてくるのではないかなと思いますので、頑張ってくださいと思います。

▶ **齋藤市長**

ありがとうございます。

最後の齋藤委員からあった中学生の海外派遣研修については、コロナ禍もございまして、取り止めになってから随分久しいんですかね。

ただ、中学生の海外派遣研修には自己負担もございまして、選ばれた生徒しか、なかなかそういう体験ができないということもあって、多分英語学習・英語教育にかかる予算については同額程度を維持しながら、代わりに色々な取組を行っているはずですよ。井上先生（管理主事）、どんな取組が始まったんですかね。

▶ **井上管理主事**

海外派遣に代わって、英検講座をまず始めました。それを 2 年やって、3 年目に英語学習講座を拡大して実施しました。

▶ **齋藤市長**

そんな取組を現在させていただいているところでございます。

なかなか難しいのは、私は行かなかったですけど、例えば、かつては栃木県少年の船なんていう企画があって、小学校 6 年生の各学校から選ばれし者が、船に乗ってどこか行くとかですね。私事としては、ちょうど植樹祭の直後だったので、全国緑の少年団の全国大会に地元枠として、各学校 2 人ぐらいですかね、それに選ばれて行くとかですね。あとは塩谷広域行政組合の、船に乗る事業も多分あったと思うんですけど、つい最近まで。

そういった形で、非常に貴重な経験を積む児童生徒の皆さんはいらっしゃると思うんですが、これ悩みどころで、ちょっと今日の学力向上とは外れてしまうんですが、なかなか全員が行くような機会がないというところですね。

例えば、ちょっと話ずれるかもしれないですけど、県内の市町では、8 月に広島への平和学習ということで、これも学校の中から中学生何人かが選ばれるというのがあったんですが。前の村上教育長と話をして、それよりは、DVD を買って、平和学習みたいなものを作って、（生徒）全員が、薄く広くって言い方が適切かどうか分かりませんが、そんなことをやってもいいんじゃないかということで、矢板市としてはあえてそんな形で取り組ませていただくという方向性があったんですが。身近なところでも何か将来の自分のキャリアを考える上でのきっかけみたいなものを、提供できれば本当にいいなとは私は思うんですけどね。予算的な制約はもちろんございますけれども、そういった機会均等といいますか、そういったと

ころにも配慮しないといけない。

これが多分高校になると、ある程度（将来）こういう方向でとか、大学進学でとか、例えば職業科であればこういう方向でとか、スポーツ頑張っているところはこういう方向でというのが、何か出てくるんだと思うんですが、（小中学校は）そこら辺はちょっとバランスを取らないといけないのかなという気がするんです。何か御所見あれば。

▶ 齋藤委員

皆さん色々考えてくださっていますから、その方向で良いと思います。

3年生の、特にこの学力調査関係につきましては、やはりある程度、前もって対策をしないと、私ははっきり言って得点取れないと思います。

高等学校ですと、ほとんどの生徒が共通テストに向けて、もう本当に一生懸命やっていますね。あとは、問題集を大変一生懸命やっているんですが、やっぱりある程度やらないことには、やらせないことには駄目だと思うんですね。

ですから、1学年2学年のうちから、学力調査をやるというのは、私は非常に良いことだと思います。

ただ、それでもやはり、一番は毎日の授業。授業を充実させないとやっぱり駄目だというふうには思っています。ですから、もう入学当初のときから、矢板市内の中学校の先生方が、2年後の3年生のこれ（学力調査）に向けて一生懸命やらせる、ということがいいのかなと思います。

特に、今市長からお話がありました、放課後学習塾ですか。先ほどお話しした子と色々話したところ、妹が矢板中学校の3年生にいるんだって言うんですよ。じゃあ、ちょっとその生徒に話を聞いてみようかなというふうに思いまして、私、土曜日に、保護者と、その生徒（お姉ちゃん）もいたんですけども、中学3年生を学校に呼びまして、いろいろ話を聞きました。すると、（放課後学習塾は）非常に良いという話だったんですよ。今は隔週なんですかね、毎週やって欲しいとか、1、2年生のときから何でやってくれないのかなとか、そんな話をしていました。

学校自体は、前に小原先生（教育監）からもお話伺いましたけども、非常に落ち着いているんだそうです。休みとかそういうのはあまりないというような話でした。

それで、英語のクラスにその子は出ているらしいんですけども、何か自分で課題を見つけて、質問があると質問に対して先生が答えてくれるので、自分としては合っている、というような話でした。

とても有効的なことで、「今後、より良くするためにどうしたらいいんだい？」なんて話を聞いたところ、保護者も、それからその生徒も、低学年からやってくればもっといいんじゃないのかなと、そんな話をしていました。

あとは、全ての子が出られる訳ではなく、希望なんですよ？希望でもその子は、英語のクラスに出られたんでよかったということです。ただ、欠席がちょっと多かったみたいな話

はその子もしていました。折角そういう機会を設けてくれているのだから、参加するっていう意思を決めたからには、最後までやり続けることができれば、少しずつではありますけれども、学力が向上していくのではないかなというふうに思います。主体的に（学校に）残ってやっているわけで、非常にいいことですから、ぜひ拡充して欲しいというふうに思います。

▶ **齋藤市長**

ありがとうございます。

このことについては、小原教育監の方で来年度に向けた方向性みたいなものがあれば、例えば拡充で、中学校放課後学習塾について今どんなことを考えていますか。

▶ **小原教育監**

拡充でお願い（予算要求）しているところですが、お気軽に休んでしまうというところがすごく気になっているので、そこについては業者ともっと細かく詰めないといけないなと思っているのと、子供たちの話を聞くと、親が勝手に申し込んだ子と自分で申し込んだ子とでやはりスタートからモチベーションに差があるようで。親が申し込んだけど頑張ってる子もいるんですけど、そのままずっとモチベーションが上がらない子もいるようなので、申し込むときにやっぱりある程度、「申し込んだからには頑張ります」といった本人の申し出もあるといいのかなと思います。それから、お休みがあまりにも続いたときには、やはり連絡をいれるとか。今回は私の方で連絡しているんですけども、業者の方でもう少しまめに連絡してもらえるとありがたいのかなと。あとは今、齋藤委員がおっしゃったように、自主学習で進められる子もいれば、教えて欲しいという子ももしかしたらいるかもしれないので、自主学習コースと教えてもらいたいコースを作った方がいいのかとか。あとは習熟度学習をやるようになってから、生徒ももちろんなんですけど、講師の教え方の熱の入りがやはり違うので、初めからもう習熟度で希望を取って実施した方がいいのかとか、今様子を見ているところなんです。

▶ **齋藤市長**

定員増みたいな話、拡充してはというお話がありましたが、いかがですか。

▶ **小原教育監**

もしも、そういう条件があるんだったら、お子さんと親御さんの意見が合わない可能性があるんで、定員に満たないときには、2年生に声をかけて、そこ（放課後学習塾）に入れてもいいのかなと。あとは、途中でやめたいという子が現れたときには、追加募集ということで新たな生徒を入れてもいいのかなと考えています。10人以上になってしまうと困るんですけども、片手ぐらいの人数だったら、途中で入っても、保険の方は何とかできますと業者の方も言ってくれているので、そんな対応もできるかなと思います。

▶ 齋藤市長

わかりました。ありがとうございます。

これ、(4)の中学生学力調査の実施っていうのは、全国学力テスト等の模擬テスト的意味合いもあるっていう理解でいいんですか。

▶ 小原教育監

そんな感じです。同じ業者が作っているテストなので、模擬テストのような内容です。

それをやってみて、今年度どれだけ（学力が）身についているかというところを先生方に把握していただいて、今年度身につけていないところは今年度のうちに何とか支援したいというところで、残り3か月頑張っていこうという狙いがあります。

▶ 齋藤市長

わかりました。

齋藤委員からお話があった大学受験、過去問というお話がありましたけど、私、中学生放課後学習塾の開校に先立つ形で矢板中学校と片岡中学校で、キャリア教育の講話をさせていただく機会があって。その時になんで学力向上が必要なのかっていうことで、夢を追うはいいのだけでも、日本は資格社会だという話をしました。大げさなことを言うようですけど、受験勉強を通じて勉強のやり方を勉強して欲しいというような話をしたのですが、私自身の経験からして、高校受験を突破するのみならず、社会人になっても、そういった取組が必要ではないかなということを強調させていただいたことはございました。

今まで、どちらかという和学校教育の面から議論がありましたが、岡委員の方から保護者目線で、中学生放課後学習塾事業の評価というか、何か漏れ伝わっていることがあればそれも含めて御意見はありますか。

▶ 岡委員

子どもが参加している保護者からは、塾に行っても放課後学習塾にも出ている子もいるみたいで、やる気のある子はそこに集まるのかなっていう感じのことを聞いています。

多分、今回初めてのことで、やる気のある子は応募した。あとは、普段の授業が分からないから、そこで1から教えてくれないかなと思って応募した子もいるのかなと思うので、やっぱり集めたときに学力の差が出てしまって。とりあえず参加したけれども勉強の仕方もわからないという子もいる中で、何も提示しないで自主学習するというのが難しかったこともあって、ついて行けずに休んでしまった子もいるのかなと思います。なので、小原先生（教育監）が言ってくれたような、色々なパターンがあってもいいのかなと思っています。

この間、来年うちの子が中1になるので中学校説明会に行ったんですが、入試制度が変わるんですね。それで特色（選抜）も、筆記試験が課されるようになるということを知ったら、やっぱり基本的な学力はベースアップしておかないと、進路実現という面もあるけれども、

自分のなりたい職業の高校を選ぶとか行きたい高校を選ぶというところでの、自分の思ったイメージの進路にうまく行けない子も出てきちゃうのかなと思うと、やっぱりこういう機会が1、2年生にもあるといいなと思いましたね。

▶ **齋藤市長**

わかりました。

(3年生のみを対象としているのは) 1、2年生には部活があるからなんですか。

▶ **小原教育監**

そうですね。

▶ **齋藤市長**

3年生も途中から(勉強の)ペースが上がっている感じですよ。部活が終わってからね。

▶ **小原教育監**

夏休みが終わってからも(勉強の)熱の入り方はやっぱり違いますね。また最近ぐっと上がってきた感じです。

▶ **池田委員**

私、最初の始まったときに、この放課後学習塾を見学させていただいたのですが、やはり生徒さん自身も自分の中で、アンケートにもありますが、宿題をやる時間として確保するので、「学力」というふうにして考えたときに、やはりその子なりの動機づけというか、達成感があったときに初めて成果が上がるといったところがあるので、そういう意味では、見せていただいた際、もうちょっとお子さんたち自身に目標というか、自分の中で、小さな目標でいいんですけども、設定すること。あと、やはり岡委員もおっしゃっていましたが、私なんかもあんまり学習意欲がないところがありましたので、どちらかというところでは、講義形式の部分、ずっとではなくていいんですけども、最初の導入3か月位を、ある程度そういうふうなカリキュラムを体験できるクラスと、それから、本当に自分たちでいくらかでも開拓して、授業や学習していけるクラスというふうなところで、体験を少しメニュー化するのも何か1つの効果としてあるのかな。

ちょっと逸れてしまいますけど、家庭学習ノートコンテスト(審査)にこの間出させていただきました。もう7年目なんですね。明らかに、私、毎年出ているんですけども、今年の中学1年生の成果が上がったノートを見ると、本当に中学生って前はただただ覚えていることを列記するような、そういうノートだったのですが、それが7年目は、もう6年生から中学1年生になった子たちは、家庭学習の中身が本当にすごくバラエティに富んでいるし、興味も広がっていて。そういう意味では、やっぱり教育って時間がかかるんだなっていうふ

うなことをすごく感じたんですね。

そういうことからすると、ある程度、少しこの成果自身も、多分、来年の学力テストは（今の中学）1年生が上がってきますので、良くなってくるかなというふうに思いますし、そういう意味でちょっとメニュー化を広げること。それからあと（参加）枠は、やっぱり欠席の方たちはちょっと自分が想定したのと違ったというふうなところもあると思いますので、その辺は柔軟に対応できるような、そういうふうな運営の仕方の中での、それはもう先生の方で教育やったださっていますけれども、さらに力を入れて。

自分のしがらみ、学校のしがらみと関係ない場で自由にやれるんだったら、少しお子さんにもそういうふうな学習意欲が上がるのではないかなというふうに思うので、そういう場として、これが活用できていけばいいかなというふうには思います。

▶ 齋藤市長

小原教育監から聞いたんですが、せっかく中学生放課後学習時間が始まったのに、ある生徒さんは英語のスペルの練習をしていると。それじゃさすがにもったいないよって、小原教育監ももうちょっと教えてもらったり、教え合ったりするみたいにしたらって、ちょっと注意を促したって話を聞きましたけれども。段々これ、初めてなので色々あるんだと思うんですが、少し定員なんかも拡充していきながら、色々な目的に沿うような形で、やっていければ、来年度はですね。

▶ 池田委員

かなり柔軟に動ける、そういう授業として位置づけると、すごく使い勝手もいいんじゃないかなという感じがします。

▶ 齋藤市長

逆にですから、学力向上底上げというのがありますが、本当に英語とか数学ができる子が、もっとこれやりたいというふうに持ち込んで、講師の先生とがっぷり四つに組んでというの、中にはあってもいいと思うんですよね。

すみません、宮本委員。最後になってしまいましたけど、御発言があれば。

▶ 宮本委員

皆さんのお話聞いていて感じるころは、やはり将来に向けて、生徒さんがふんわりでもいいから、何か目標が持てている子っていうのは、強いのかなっていう気はします。

その中で、ここ数年来のこの学力の数字を見ての対策ということになりますけれども、こういった学習塾の設置とか、そういった環境の整備をすることは、もちろん大人がやってあげられることで、必要なことだと思います。

今年1年やってみての色々問題点出てきていますので、先ほどの生徒さんの言葉を見ても、

やはり色々な人たちが一堂に集まり、そこに講師の先生1人ついて見るっていう部分では、やはり当然ながら、こうしていかなきゃならないなのが見えてくると思うので、より良い方向で、ぜひ来年以降、続けていっていただければありがたいと思います。

で、いくら周りが頑張っても、やはり生徒の皆さん個人個人が、いかに士気を高めてもらえるか、そこがやはり一番なので、そこをどうくすぐって、いい方向に持っていければいいのかなっていうのが、一番の1つの課題だと思うんですね。

そんな中で先ほども資料にもありましたけども、授業力向上対策研修会であるとか、そういった取組がなされているということで大変ありがたいです。何によって意識が高まるかという、やはり授業の大切さについて齋藤委員が先ほどおっしゃっていましたが、分かれば、楽しくなってくるというか、学ぼうとしていると思うんです。なので、色々な生徒さんがいる中で、難しい部分もあるんです。もちろん、先生方の環境も踏まえて、この後の話も繋がっていくんですけども、そういう中で大変恐縮ではあるんですけども、ぜひ理解させる授業っていうんですかね。ぜひそんなところを対策研修会の中に1つの議題として挙げていただいて、そんな授業の展開をしていただくと、結果的に学力が向上していくと。点数上げるために勉強しなさいではなくて、目標を持って、夢に向かって（勉強すること）が一番理想なんです。それで、わかる授業になって楽しくなって、結果的に最終的に学力上がっているねと。これを最終的にも将来的に見ても、全て身になることだと思うので、ぜひそういった授業の展開がなされるのが一番いいかなって、ちょっと勝手ながらお願いをしたいと思います。

▶ 齋藤市長

ありがとうございます。

次年度に向けてのスライド出していただいても大丈夫ですか、最後のページ。

最後宮本委員からお話があった取組、中学校授業力向上対策合同研修会、これは継続をすると。あとは例えば矢板市立中学校版学力向上推進リーダー事業の検討。これは、小学校版については、すでに実施をされているということでもいいですよ、教育監。

▶ 小原教育監

はい。

▶ 齋藤市長

これを中学校まで拡大をするということで、先生方にもより頑張ってもらおうというような取組が、来年度に向けて具体的な検討がされているところでございます。ぜひ先生方にも、より一層の御尽力をお願いしたいというふうに思っているところでございます。

この次年度に向けての5つの項目がございます。

先ほども申し上げましたように、中学生の学力向上ということで、これまで小学生向けに

取り組んできたものを中学校まで拡大するというようなものもございまして、中学生放課後学習塾自体については、その取組自体を充実強化するというような内容になっております。

このことについて、最後に何か御意見ですとか、御感想があれば御発言をいただいて、特になければ次の方に進みたいと思いますが、何かございましてか。

▶ **齋藤委員**

2つあります。今の議論は中学生についての話だったんですけど。やはりですね、学ぶことの楽しさ、新しい知識がどんどんどんどん上がっていくということは、非常にいいことだと思うんですね。そのようなことも踏まえて、小学生対象に、何か今やっていますか。うちの子供なんかは、矢板小学校の隣で、退職した先生が数学、算数なんかを教えてくれたり、さっきのお話の方の子供も、生涯学習館で、お兄ちゃんが何かここで、漢検だか数検の勉強をしていて、一緒に来て（勉強していた）っていうようなことの話だったんですけど、そういうことやっていますか、今。

▶ **井上管理主事**

はい、今もやっております。

▶ **齋藤委員**

じゃあ、ぜひですね、そういうこともPRして、学ぶことの楽しさ。小学生でも、今算数、数学検定とか、あるいは漢検。今は英語もやっていますから、英語できる子は（英検）4級とか3級受かっちゃうんだと思うんですね。ですから、そういうような目標を持たせて、わかる授業、宮本委員からもありましたけれども、達成感・成就感がないとやはりなかなか進まないんですね。いくら勉強しても、例えば点数が上がらなかつたらもう諦めちゃいますから。やれば何とかなるんだ、みんなどの生徒もより良くなりたいというふうに思っていると思いますので、達成感・成就感を味わわせてあげられるようにして欲しいと思います。

あとは、先ほどお話しした子は宇都宮大学工学部に合格したんですが、さて、大学卒業した後、要はどうなのかなあと思ったりするんですね。ぜひ、泉地区に新しい道路ができて、スマートインターチェンジもできていますから、泉地区の辺りに市長の御尽力で、企業をどうにか誘致してというようなことだと税収も増えますし、いいのかな。

せっかく矢板で育てた子供が、地元に戻ってきて、地元のために貢献できる、というような矢板市にしていただければ、より魅力的な矢板市になるんじゃないかなと私思います。ぜひ、そういうところをお願いしたいと思います。

▶ **齋藤市長**

後段の部分については、12月22日だったと思いますけど、矢板市北部地域における産業団地の立地検討に関する意見交換会というのをやらせていただくことになっていまして。泉

地区とあわせまして、下太田、さらには土屋、矢板北部地域といいますか、泉地区に隣接している地域。

齋藤委員からありましたように、国道4号の矢板大田原バイパスとか、県道矢板那須線の泉バイパスの整備工事が進んでおりますし、一昨年3月には矢板北スマートインターチェンジの開通をして、沿線開発というのをようやく具体的に検討できる段階になったものですから、住民説明会というよりはまず意見交換会をやらしていただくことになっております。

そして前段の部分についてですけれども、小学生ということだと漢検数検講座やっていたり、英語は、井上先生（管理主事）、何か一日英語体験じゃなくて、何か（あったと思いますが）。

▶ **井上管理主事**

イングリッシュイベントです。

▶ **齋藤市長**

イングリッシュイベント。どんなイベントでしたか、簡単に。

▶ **井上管理主事**

子どもたち30人が集まりまして。今年で言いますと、3日間、土曜日、2時間行いました。ミッションゲーム、宝探しみたいなものなんですけど、それからお買い物ごっこ、それから海外体験を行いました。

▶ **齋藤市長**

これを全部英語で。英語で小学生がやると。

▶ **井上管理主事**

はい。オールイングリッシュでやりました。

▶ **齋藤市長**

英語で小学生がやるというのが、きっかけ作りということで、そんなことなんかにも取り組ませていただいているところでございまして。池田委員からもありましたけど、小学生のときの頑張りが中学生になっての学力向上に繋がってくるというお話ありましたけれども。

中学生の学力向上というテーマではございましてけれども、小学生であったり、さらに申し上げますと、もしかすると未就学児から、教育委員会に関われる部分ももしかするとあるかもしれませんので、そういったところにも意を用いて、取り組ませていただければなというふうに思っております。

ほかによろしいでしょうか。大丈夫ですか。

(発言なし)

(2) 学校部活動の地域移行について

▶ 齋藤市長

それでは次のテーマ、議題の(2)でございます。

学校部活動の地域移行について、これを議題といたします。

このことにつきましても、まずは事務局から説明をお願いいたします。

▶ 森本指導主事

では、資料スライド、いっぱい用意をしたんですが、時間も限られておりますので、赤で囲んだところをかいつまんで説明の方をさせていただきます。よろしく申し上げます。

まず、令和2年なんですが、国から学校の働き方改革を踏まえた部活動改革の方が示されました(赤枠スライド①)。これを受けまして、令和3年度から、栃木県では、矢板市と佐野市が休日の部活動の地域移行の実践研究ということで、取り組ませていただきました(赤枠スライド②)。実践研究の成果については、資料のとおりとなります。アンケートの結果を、表には載せてあります。

続きまして、令和4年、昨年12月なんですが、国からガイドラインの方が示されまして、このガイドラインにおきまして、学校部活動と地域クラブ活動の位置付けが初めて国の方から出されました。このガイドラインなんですけれども、「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる」といったことも示されております(赤枠スライド③)。

続きまして、県の動きなんですけれども、令和5年、今年3月、栃木県が「とちぎ部活動移行プラン」を策定しまして、その中で、令和7年度までに全ての公立中学校の休日の部活動を1つ以上、地域クラブ活動にすることを目指すといった目標が示されました(赤枠スライド④)。

矢板市はと言いますと、今年度、これまでの矢板中学校に片岡中学校も実践校として加えました(赤枠スライド⑤)。平日は学校の部活動、休日は地域のクラブ活動といったこととなります(赤枠スライド⑥)。

実際、今年度矢板中で、地域クラブ活動として行ってる種目ですが、このようになります(赤枠スライド⑦)。今のところ矢板中では5つの部活動、片岡中(赤枠スライド⑧)におきましては、6つの部活動を、休日地域クラブ活動ということで行っております。

今年度の地域クラブ活動なんですが、国のガイドラインによりますと、教員なしで地域の指導者の方で指導するということが示されましたので、昨年度までは教員が手伝いということで来ていたんですけれども、これだと実証事業はなかなか成果がわからないということで、教員なしで、地域の方でどれだけできるのかということで、実証研究を行っております。

ただ、すべての土日を地域クラブ活動としては行っておりません。理由としましては、昨年度までの課題で、学校の先生と地域の指導員との連携不足というものが挙げられました。その課題を解消するために、連携を図るために、月に何回かは学校部活動として、先生と地域の方が一緒に指導に当たりながら、業務内容の打合せを行ってはどうかということで、月に1回程度は部活動として、そのほかの3回程度は地域クラブ活動ということでやらせていただいております（赤枠スライド⑨）。

先ほど申しましたように、今年度は教員なしで、地域の方で指導していただくということにしましたので、資料にいくつか載せましたとおり、指導員の業務内容とか、特に事故があったときの対応の手順などを明確に示させていただきました。それが今年度のことになります。

それから、県内での今年度の実施状況はどうかと言いますと、こちらの表にあるとおりです（赤枠スライド⑩）。今までやっていた矢板市と佐野市に加えて、小山、栃木、那須塩原で、市が直営ということなんです、今年度実証事業を9月から始めました。県立高校の方でも始めたということなんですけれども、県が謳っています令和7年度までに全ての公立中学校1つ以上地域クラブ活動までは、まだちょっと道のりが遠いんじゃないかなと思います。

最後です。実践研究での成果と課題はということなんです、成果はやはり教員の負担軽減に繋がること。それから、専門的な技術指導を生徒にとっては受けることができますので、技術も向上するし、意欲も向上が図ることができたということが挙げられました（赤枠スライド⑪）。

ただ一方、課題はたくさんございます。こちら（赤枠スライド⑫、⑬）に載っているのはほんの一部代表的なものなんです、課題の方が多んじゃないかなと思います。

10月に地域クラブの協議会ということで行ったんですけども、その中で出た意見なんです、やはり地域の指導者の負担がかなり大きいということを言われました。指導者1人で技術指導するほかに、生徒指導だとか、あとは大会があったら引率をするだとか、あとは事故が起こったときに対応しなくてはいけない、といったこともあって、とても1人では大変だと。複数人配備してくれといった御意見をいただきました。

あと、現在は地域クラブということで、指導者を確保できているんですけども、なかなか指導者の方も高齢化というのは否めませんので、持続的に今後指導者を確保できるとは限りません。

あとは、参加費の費用負担が大きいです。現在は実証事業なので、国からの補助を受けて、保護者には負担なしということで行っているんですけども、本格実施となった際なんです、地域クラブに移行した種目の保護者だけからお金をもらうのか。あとは多くの部活動を地域移行クラブということで積極的にやっている市町と、いやうちはまだだということで消極的な市町では差が出てしまうのではないかと、いうところも大きな課題ということで挙げております。

ということで、来年度も、今までの課題を1つでも解消しながら実証事業を行ってはどう

かということで、予算要求の方はさせていただいた次第でございます。

以上が説明になります。ありがとうございました。

▶ **齋藤市長**

ありがとうございました。

議題の(2) 学校部活動の地域移行について、事務局から説明がございました。

成果より課題の方が多というような締め括りでございましたけれども、栃木県内における矢板市の取組、御案内のように令和3年度からモデル事業の実施に当たっておりまして、矢板市にあっては矢板中学校、もう1つ、栃木県内では佐野市の田沼東中学校。この2校がモデル校になりまして、部活動の地域移行に関する実証事業に取り組んできたというところでございます。

課題が多いという指導主事からの説明でございましたけれども、例年7月から8月にかけて、県の方へ予算要望の活動で回ること、私、市長になってから回らせていただいて、今回は7月の下旬だったかと思いますが、県教育長、県教育委員会のところに行き、この件を持ち出したら、矢板市さんには大変お世話になってますと、矢板市さんが一番進んでますと(県教育委員会から言われた)。いや、これ本当だよ、森本先生(指導主事)ね。

栃木県内の実施状況をスライド出させていただいたと思うのですが、矢板市と佐野市がモデル校ということで先駆的な取組をやっていますけど、佐野市が月2回までと月3回以上ということで全然取組の程度も違いますし、矢板市の方が現段階では非常に取り組んでいると。

ただ、そこで感じたのは、実証事業をより積極的に取り組んでいるからこそ、課題もより鮮明に見えてきているというような面があるのではないかなというふうに思っております。

そうした中で、県教育委員会の評価を額面通り受け止めるのであれば、矢板市の取組が栃木県内の部活動の地域移行の将来を切り拓くというぐらいのイメージで、今日は御議論をいただければ大変ありがたいと思うのですが。どうでしょう、岡委員の方から、片岡中学校は今年度からですかね、矢板中学校ではずっと取り組んできたんですけども、なかなかやはり教員の負担軽減ということを考えていく上では、これは避けては通れない課題だというふうに思っているところでございます。保護者の負担なんかはやっぱり気になる場所ですかね。

▶ **岡委員**

でしょうね、金額が増えるとなると。今でも部活の部費を払っている部活がほとんどだとは思っているので、それぐらいなら払えるって思っている保護者と、もっと金額が増えてしまってそれを負担に感じる保護者もいると思うので、どの程度出せるのかっていうのは家庭によって変わってしまうでしょうし、そこは難しいです。かと言って、(指導を) やってくれる人もいないわけで、そうなるそこにはお金がかかるわけで、なかなか難しいところなのかなと思うんですよね。

▶ 齋藤市長

ありがとうございます。

宮本委員はどうですか、部活動の地域移行。宮本委員のお子さんの頃は多分そんな（なかったのではないのでしょうか）。そうでもないですか、地域の人が教えるなんていうのは。中学校の部活を、小学校のクラブ活動はいずれにしてもですね。

▶ 宮本委員

なかったですね。

まず、これをやるにあたって、先生方の環境改善をすると。しいては教員不足なので、そういったところにね、目を向けてくれる、(教員を志して) 大学を卒業する人たちが増えていて欲しいというのも当然繋がっていくことだと思うんですけども、課題を見れば見るほど、なかなかやっぱり、すぐには難しい問題だと思う現実ですよ。

矢板の場合、モデル校だということで、ここ2年間、他の地域に比べればもちろん全然進んだ活動がされていましたけども、これやっぱり地域間に差があるのも問題ですし、部活動によって差があるも問題ですし、それをどう平らに進めていくかというのは本当に課題があること。

ただ、やっぱり環境改善を考えた上では、やっていく、続けていく必要性は、これ当たり前のことであるので、何とか続けなくてはならない。

1つやっぱり気になったのは、スポーツクラブにお世話にはなっているんですけども、どのレベルでお世話になっているのか。最初は、とっかかりはやっぱり森本先生（指導主事）みたいな、随分あちこち走り回っているっていうようなことがね、目に見えてくるとなると、ちょっと大変なことなんで。

▶ 齋藤市長

矢板市の場合は、たかはら那須スポーツクラブという総合型地域スポーツクラブがあるだけでも良かった面はあると思うのですが、だからといって、たかはら那須スポーツクラブが万能ではないので、宮本委員から御指摘あったように、何か森本先生（指導主事）は色々たかはら那須スポーツクラブがやるべきところまで結構頑張って、指導者集めに奔走しているという話は少し耳に入ってきますが。森本先生（指導主事）、差し支えない範囲で何かありますか、指導者の確保について。

▶ 森本指導主事

本来、やっぱり委託された業者が選んでくるのが筋ではないかなとは思っていますが、業者の方も選ぶのは難しいようで、見つけてくれとか。たまたま部活動指導員ということで、平日お願いしている方はいますので、その方にクラブの方でもやってくださいっていうふうをお願いしているのが現状なんですけれども。

▶ 齋藤市長

市町村教育委員会であれば、小中学校の先生であれば、この先生は何々が得意だとか、ずっと指導者として優勝させたこともあるとか、学生時代こんな部活もやっていたってというような情報があるかと思うのですが。今年の夏、県教委にお願いして、阿久澤教育長にもお願いしてきたのですが、何とか小中学校の先生だけじゃなく、高校の先生。どうしてもやっぱり市町村の教育委員会の弱いところは、高校の先生ですと。どういう先生が県立高校の先生で、こんな指導され、例えば何の教科を教えて、こんな部活の顧問をされていて高名だった、みたいな情報がなかなか入らないので、ぜひそういったところはということをお願いしてきた経過がありまして。最近はそのような形で県教委の方でも、何か指導者バンクみたいなものを作ってくれるんですよね。作ったんでしたかね。

▶ 森本指導主事

作ってくれました。

▶ 齋藤市長

作ってくれた。段々には、そういった充実強化がなされていく。

例えば、たかはら那須スポーツクラブでいうと、弓道なんかは矢板中学校強豪校の1つに県内でも数えられていますけれども、宮崎博さんは、私立矢板中央高校の先生をされていて、現在、弓道の中学生ですか、矢板中学校の指導に当たっていただいているとか。そういった方、発掘すればいると思うんですよね。だから、そういったところもちょっと頑張れる余地はあるのかなと。

あとは、生涯学習課の所管になりますけれども、やはり矢板市スポーツ協会に入っている各種団体も、なかなか若い人が入ってこない。若い人に入ってもらうためには本当に、中学生の頃からきっちりと競技力向上といいますか、そういったものに取り組みなくてはいけないというようなことを、ぜひ矢板市スポーツ協会の各団体の皆さんにもお願いをしていかなくてはいけないかなあというふうに思っています。

そういう危機感はどうですか、生涯学習課長、ありますか。

▶ 佐藤生涯学習課長

市長がおっしゃるように、なかなか若い方に繋がらないという現状がありますので、そこをやはりいかに繋げていくかというのが、我々の課題だと思っております。

▶ 大澤スポーツ推進室長

今、担い手については、各団体すら、自分たちの団体の運営もままならない状況になりつつありまして。できる限り指導者の育成事業、特に自分で（競技を）やられてきた方が、各団体（指導者を）担っているんですけど、教える側としての資質がどこまで備わっている

かというのは注意しなきゃいけない。教え方等々の学びというのも各指導者必要です。

▶ **齋藤市長**

そういうことですか。名選手必ずしも名監督ならずみたいな話ですか。

▶ **大澤スポーツ推進室長**

昔のパワハラ気質の方ですとか、その辺りは注意が必要かなと。

▶ **齋藤市長**

なるほど。ただ弓道なんかは、多分ああやって弓道連盟の方が、たかはら那須スポーツクラブを通す形で指導されているので、多分矢板市弓道連盟は他の競技団体に比べれば、将来安泰というか、安心だなんていう気はするんですけどね。そういうような事例が、もっとも増えていけばいいなっていうような所感は持っているんですけども、はい。

池田委員、何か御所見ありますか。

▶ **池田委員**

この根底には、宮本委員がおっしゃったように、やっぱり先生の職場環境改善というふうなところがありますので、ここの課題に挙がっている人材の確保っていうふうに言ったときに、地域移行型で描くイメージが、(指導者である)大人の勝利至上主義の部活であっては、多分、指導者の確保はすごく難しくなってくるかな。このアンケートの中に、生徒たちが部活動に求めているのは友達と楽しく、遊ぶっていうか、そこで学ぶっていうふうな、そういう回答が多数を占めているんですよ。

とすると、勝利至上主義は、もっと専門の地域クラブにお任せをして、誰でもが少し体験できて、そこを指導する人っていうふうになったときに、今高校の先生というお話もありましたけれども、大学の学生。ある程度、自分たちでサークルとか何かやっているような、教職を目指している教育学部でもいいんですけど。白鷗大学でも作新学院大学でもどこでもいいですが、学生さんたちに呼びかけて。勝利至上主義っていうスタンスを取り除けば、もうちょっと指導者としてのハードルが低くなるんじゃないか。で、高齢化していくのは、もうどうしようもないと思うので、ぜひそういう若い人材がいそうな(ところを活用してはどうか)。

そうすると争奪戦になりますけれども、例えばここだと国際医療福祉大学の学生さんであっても、そういうサークルをやっているところに声を掛けて、「時給これだけです」っていう中でやってくださるような、見守りを主体としたような指導者の養成。その中で、少しずつ人材を育成していくような、こういうスタンスをちょっと取ってもいいのかな。

地域に移行するという段階で、描く部活動のイメージを少し変化させ、今まで我々がやってきたイメージではないものを想定してもいいのかなというふうな気はします。

▶ 齋藤市長

ありがとうございます。

確かに競技力の向上、それこそプロを目指すということであれば、サッカーで言えば、たかはら那須スポーツクラブがやっているヴェルフェ矢板のジュニアもありますし、野球で言う矢板市にはございませんけど、いわゆるボーイズリーグのチームがさくら市と大田原市にあたり。矢板中学校の野球部に入るよりは、そういったボーイズリーグのチームに入るということもありますし。確かに、そういった中で、プロを目指すわけではないんだけど、仲間と汗を流したい、頑張りたい、中学校生活の思い出を作りたい、という方向けには必要ではないかなというのが1つ。

あと、大学生ってということだと、矢板市は今まで、宇都宮大学とか、あとは作新学院大学とも包括連携協定締結していると思うんですけど、教科指導みたいなものは来てもらったことが不定期ではあるような気がしますけど、部活の指導はなかったかもしれないですね。

▶ 池田委員

争奪戦にはなると思いますよ。県内全部やるとすると。だからある程度、そこはちょっとルールが必要かなと思うんですけど、人材発掘という視点では1つ選んでもいいかなと思いますし。会員のサークルでもいいですけど。

▶ 齋藤市長

社会人のチームなんかがあれば、いいかもしれませんね。

最後、この議題について齋藤委員に御発言いただくに当たり、一通り御意見いただいた中で、私この部活動の地域移行を考える中で、部活動っていうのは学校教育の一環なんだと、だから学校の先生が教えるべきだ、的な意見も少なからずあるのかなと。で、部活動の指導をやりたいから教員になったっていうと大げさですけども、それを1つ目標にして夢にして教員になった方なんかも、中にはおられるというように聞いております。

そういった中で、そういった教員の方や学校教育との折り合いといいますか、どのような調整を図っていくのか。何らかの配慮なり考え方が私は必要だと思うんですけど、そのことについて、まず、いかがですか。何かお考えありますか。

▶ 齋藤委員

市長から話があったような先生もいることにはいると思うんですけども、そういう先生は果たしてどのくらいいるのかなと思うんですよね。教員の負担軽減ということが今叫ばれていまして、文部科学省で旗振って、こういうふうにやっています。

実際問題として学校経営していく上で、運動部活動の顧問を充てるというのは非常に校長としても大変なことで、無理してお願いしているんですよね。今、教員になりたいという方、少ないです。倍率も県によっては2倍。2倍で果たしていいのか、そんなこともあ

って文部科学省で、教員の負担軽減ということで、やっているんだと思うんですね。

ただ、色々、森本先生（指導主事）のお話からは、問題課題が山積してるということ、これはわかります。

先ほどお話しました生徒に、この話もちよっとしたんですね。その子は、矢板中学校でソフトボール部なんですって。ソフトボール部は矢板中学校で人数が集まらないんだそうですね。合同チームなんです。合同チームで、矢板中学校でも練習するんだけど別の学校（でも練習する）。阿久津中学校って言ってましたかね。ただ、関東大会に行っているんですってね。色々話を聞きますと、例えば矢板（中学校）ではそうやって地域の方が教えていて、阿久津中学校では、教員が教えていて、そうするとやっぱり色々難しい問題もありますよね、というのがその保護者のお母さんのお話でした。

確かに、色々あるんだろうなあというふうに思いますが、教員の負担軽減が図られれば、先生方が生徒と関わる時間も増えて、面接なんかも充実できるんだと思うんですね。教材研究もできると思いますから、そうすると前に戻りますけれども、生徒の学力向上に繋がるんだというふうに思います。

ここでもお金が関係してしましますが、ぜひ何とかして、少しでも矢板市は、色々な面で、教育関係については県内トップである、そういう話をさせていただいて、何とか捻出していただければ、色々な面で将来矢板市も、今人口減っていますけれども、増えてくるんじゃないかなというふうに思いますので、よろしくお願いします。

先ほどのお話、もう1回言いますけど、それほど部活動をものすごくやりたいっていう先生、いるのかなあって。小原先生（教育監）とか森本先生（指導主事）はいかがですか、やりたかったですか。なかなか大変ですね。

▶ **森本指導主事**

休日はやはり、はい、休みたいというか。

▶ **齋藤市長**

そうですね。

▶ **池田委員**

割り当てられるんですね、先生方、要するに異動があつて。

▶ **齋藤委員**

割り当てられるんです。異動があると、すぐになくなる先生がいますから、そこに充てなくてはならないんですね。少子化だから先生の数は減ってますけれども、この辺お話しましたけど、部活動の数は減らないんですね。それも減らさなくちゃならないと思うんで

すよね。高等学校ですと、1クラス減になると2人先生がいなくなるんです。3年間だと6人ですよね。その分、どの部も第3顧問ぐらいまで充てる形になりますから、やっぱり1人の負担が増えますよね。ですから、難しいところもあります。

▶ **齋藤市長**

部活動の数は減らないものですか、やっぱり。部活動も選択と集中というわけにはいかないんでしょうね。

▶ **森本指導主事**

部員数がかかなり減っている部もありますので、やはり減っている部については、廃部も学校で検討するべきではないかなと思います。先ほどのソフトボール部は2名しかおりません。

▶ **齋藤市長**

部活動についても本来であれば、より多くの選択肢を生徒さん方に示せばいいんですけどね、なかなかそうもいかないですね。

部活動の加入率っていうのはどうなんですか。以前一昔前ふた昔前と比べて変わらないですか。

▶ **森本指導主事**

落ちています。やはり、野球のボーイズリーグとかサッカーのクラブチームとかに流れていく生徒が多いです。

▶ **齋藤市長**

なるほど。わかりました。

齋藤委員からお金のお話が出ましたけど、森本指導主事からすると、来年度何か充実強化で予算要求されているものってあるんでしょうか。部活動の地域移行関連では具体的に最優先的なものは何ですか。例えば、指導者の問題は、やっぱりお金だけでは解決できないってあると思うんですけど。生涯学習課で持っているものも含めて、何ですかね一番目玉は。

▶ **森本指導主事**

来年度は、増額で予算要求を出させていただいたんですけども、指導者の数を、今までは1部活動当たり1人で出していたんですが、先ほどの指導者の意見からして、2名いないと何かあったときに対応できないとか、何よりも生徒に事故があっってしまったらもう大変なことになってしまいますので、指導員を2名ということで増員させていただいた予算要求です。

▶ 齋藤市長

なるほど。わかりました。

▶ 池田委員

時給単価（の増額要求）もありましたよね。

▶ 齋藤市長

そうですね、単価も必要かもしれないですね。

▶ 森本指導主事

単価を、今のところ時給 1,400 円でやっているんですが、とてもとてもこの業務内容から 1,400 円では安いのではないかなと。

▶ 齋藤市長

平日朝から晩まで 1,400 円というわけじゃないですからね、1 日当たり 3 時間ですもんね。わかりました。

ただ、財政担当の査定で認められたとしても十分な人が集められないと、それ見たことかということで翌年度お返しがくるので、（課題は）ある程度人の手配、要は指導者ですよ。第 2 顧問みたいな方というのは、そんなにそのスポーツの嗜みがなくてもできる人では駄目なんですかね。例えばシルバー人材センターから。シルバー人材センターじゃ駄目かもしれないけど、例えば、例えばですよ。そんな人でも、意欲のあるアクティブシニアの方っていらっしゃるような気がするんですけどね。それじゃ駄目なんですか、やっぱり。

▶ 森本指導主事

いや、それで十分だと思います。逆に、人との繋がりとかそういうのが長けている方でいいのではないかと。

▶ 齋藤市長

子供たちのお世話がうまくできるみたいな方がいるといいかもしれないですよ。

▶ 森本指導主事

はい。

▶ 齋藤市長

わかりました。来年度の予算要望等についても、ちょっと聞かせていただいたところでございます。現在、矢板市で言いますと、今財政担当の査定作業が進んでおりまして、1 月入っ

て早々に市長査定がございます。

大枠が決まって1月の半ばには、新規主要事業を対外的にも公表する。2月の上旬になりますと、予算案の概要を発表し、2月の下旬からの3月定例会議にかけられるというようなスケジュールでございますので。本日委員各位からお話いただいた内容、御発言いただいた内容は、まだまだ盛り込める余地は十分ございますので、だからこそ、このタイミングに総合教育会議を開催させていただいたという面もでございます。しっかりと予算の裏付けをつけられるように、努力はさせていただきたいというふうに思っております。

それでは、議題の(2)学校部活動の地域移行についても、言い残したということがなければ、終わらせていただいてよろしいでしょうか。

(発言なし)

(3) その他

▶ 齋藤市長

それでは(3)のその他でございます。

年に1回の総合教育会議でございます。(1)、(2)の議題に限らず、何か言っておきたいということがあれば、委員さん方からあれば、御発言いただきたいと思いますが、どうでしょうか、よろしいですか。

▶ 齋藤委員

特にありません。

▶ 齋藤市長

はい。では、最後教育長から何かあれば。総括的なコメントでも何でも結構ですが。

▶ 塚原教育長

今回の総合教育会議は、教育委員会が課題とする中学生の学力向上、学校部活動の地域移行、この2つを議題にあげていただきありがとうございました。

先ほど、学力向上で説明した各種施策、また学校部活動も令和3年から積極的に矢板市で取り組んでいるというのも、市長の方で予算の方を手当てしてくれてこの事業が行われているということに、まずお礼を申し上げたいと思います。

また、次年度以降につきましても話がございましたので、課題等も共有させていただけたと思いますので、何卒どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

今日はありがとうございました。

▶ 齋藤市長

ありがとうございました。

それでは、私の方からも最後一言申し上げたいと思います。

矢板市でございますけれども、今年の6月に県内の自治体では初めてになりますが、「こどもまんなか応援サポーター」というものを宣言させていただきました。

今年は4月1日付で、こども基本法という新しい法律が制定されるとともに、新たなこども家庭庁という省庁も設置をされたところでございます。

このこども家庭庁におきましては、こどもに関する施策や事業を社会の真ん中に据える「こどもまんなか社会」の実現を目指してございまして、その「こどもまんなか社会」の趣旨に賛同する自治体であったり企業であったり団体等を「こどもまんなか応援サポーター」として認定をすると、宣言を受け付けるというようなことでございまして。矢板市、今年の6月でございましたけれども、市として「こどもまんなか応援サポーター」になるということを宣言させていただきました。

あわせて、当面の子ども・子育て支援施策を、「Yaita こどもまんなかプロジェクト」というふうに取りまとめをさせていただきまして、結婚婚姻から妊娠、出産、就学までの間の様々な取組を自助・互助・公助、この3つのステージでとらえていく、というような取組を整理させていただきました。

時間があれば本日、1枚のペラをお持ちすればよかったのですが、そのような中で、これ所管は健康福祉部の子ども課でございまして、主に未就学児向けの取組にスポットを当てておりますが、当然、子ども・子育て支援という話になりますと、小・中学生から高校3年生までが対象になるわけで、年齢的には18歳まで対象になるわけでございますけれども、そのようなことで、力を入れさせていただきたいと。実際、色々な取組を年度途中からも始めさせていただいているところでございます。

そういった中で、ぜひ学校教育。小学校に上がってしまうと、健康福祉部子ども課よりはむしろ教育委員会のウエイトが大きくなっていくかと思えます。

そういった中で、矢板市子ども未来基金につきましても、何年か前に、子ども課から教育総務課の方に所管を移管しております。そういった財源等も、機会を捉えて活用しながら、矢板市におけるこどもまんなかの取組、前に進めていきたい、このように考えているところでございます。

来年度の予算では、当初予算からそういった取組をいくつかは盛り込めるというふうに思っておりますので、引き続き、教育委員各位におかれましても、こういった取組についても関心を持っていただいて、御指導御助言いただければなと思っております。

こんなところで、私からの発言で大変恐縮でございますが、本日の総合教育会議、閉じさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

4 閉会 (17:27)